仏心をもって世界を見る

安田理深

この「尽十方無碍光如来」、「不可思議光如来」ですね。不可思議光というのは、曇鸞大師の解釈を加えて「尽十方不可思議光如来」。無碍光というのは否定的にみるし、不可思議は肯定的に言ってあるんですが、不可思議ということがやはり『浄土論』にあるんです。「不可思議力を成就する」ということがちゃんと出ておりますから、それで「不可思議」ですね。帰命無碍光如来だけれども、それを不可思議という言葉で表わされている。このことでいちばん何よりも大事なことは、この不可思議光如来というのはいったいどういう如来かということですね。そうすると簡単に言えば、〝成った如来〟だということです。〝在る如来〟じゃないです。〝在る如来〟というよりもむしろ〝成った如来〟ですね。〝成った如来〟を通して〝在る如来〟を表わしてある。本来もとである如来を〝成った如来〟を通して表わしてある。〝成った〟とは〝成就された〟ということです。成就された如来、本願成就の、本願によって成就された如来、本願成就の如来ということを表わすのが尽十方無碍光如来とか不可思議光如来です。そういうことが、本願というところに表わしてある。だから不可思議というのは、如来が不可思議だということは、実は本願が不可思議だということを、このように表わす。不可思議の本願ということですね。だから『浄土論』の方では、二十九種荘厳功徳が不可思議と、浄土を不可思議ととらえますね。浄土でも如来でもいいんですけれども、そのように象徴する。

次に、広大無碍の一心と言われてあるのは、すぐ後の方に出てます。「彼の世界を観ずるに辺際なし、究竟せること

広大にして虚空の如し」とあります。「広大」「無辺際」、ここでは広大という言葉は〝浄土〟として、観彼世界相ですから、如来の世界は、浄土からは広大をとり、如来からは無碍をとって、それで広大無碍の一心と、こういうわけです。その広大というのはですね、浄土が広大だということは、それは浄土が広大ということを表わすことのもとに本願が広大、如来の願心が広大だ、こういうことがある。これはちょっと詳しく言わねばならないが、親鸞の全体の文章を通してみると、〝広い〟という字が非常に注意されておりますね。「広く本願力回向による」とか、あれは〝広い〟ですね。それから「広開浄土門」、広く開く。それから、〝深い〟ということもあるけれども、〝ひろい〟という意味に〝広〟ということもあるし、それから〝博士〟の〝博〟という意味、あれも〝ひろい〟ですね。

特に『無量寿経』よりも『如来会』の教言というものには非常に〝ひろい〟という意味が強調されている。如来の智慧海は深広である、とこう言う。無涯底であるということを言う。本当は〝深い〟という字もあるんですけれども〝広い〟という字もある。深く広い。そこらにですね、「広大仏法異門に生ずる」ということが『如来会』に出ています。また二十願のところに出てくる「仏智疑惑」ということがある。その仏智というものは五智、五つの智慧と『無量寿経』は表わしています。そのときにやはり「大悲広慧」、広い慧ですね。智慧の慧、「広慧」という字が出ております。〝広い〟という字は特に因位の智慧を表わすんです。〝深い〟という字の方は果上の智慧です。私は今、悟りの智慧を〝深い〟と言うんですけれども、因位本願の智慧の方を〝広い〟と言うんです。こういう意味で、さっき言いましたように一切群生海というものを代表して、一切衆生というものを背負うて立つというところにやはり〝広い〟という字が出るんだろう。だからして本願といえば、弘願と言いますですね。〝広い〟というから弘願、やはり〝ひろい〟ということです。深願ということはあまり言わないですね。弘願とこう言う。ああいうところに、一切衆生を背負うて立つというところにですね、〝広い〟という意味が用いられる。

御開山のものを見てみますと、非常に〝広い〟という字が好んで用いられている。〝深い〟よりもむしろ〝広い〟

ということ。僕らはちょっと考えると〝広い〟よりも、間口が広いよりも、奥行きが深い方がいいな、なんてこう思うんですけれども。そういう意味で、〝広い〟という意味がどういう所で出て来るか、長く頭にあったんですけれど、やはり考えてみるというと一切群生海を背負うて立つ。如来が、深い如来がですね、深い如来の位を下って、そして衆生の立場に立つ。〝深い〟というものを捨てたわけでないけれど、深い如来が如来の位を下って衆生をもって自己の立場とする、そして本願を発された。衆生となって本願を発された。深い智慧では本願を発しようがない。如来の智慧は深いけれども深いままでは本願は発しようがない。だから果上の如来が果より因位に下る。そして一切衆生というものをもって自分の立場とする。一切衆生というものに立ってはじめて四十八願というものを完成したと、こういうようなことでしょう。だから仏の覚りは非常に深いけれども、因位に立たれたというところに、やはり〝広い〟ということがある。そういう感じで特に御開山は打たれたんじゃないかと、こう思う。

だからやはり〝広い〟と言えば、因位本願というものの、願心の主張というものがあるんだけれども、それは浄土で表わしたのですから。つまり「究竟広大にして虚空の如し」とありますけれども、「広大」というのは量功徳ですね。だから光明無量とか寿命無量とか、あの無量というのが「広大」ですね。それはもともと、如来が広大というのでなく、本願が広大なんでしょう。それを象徴するんじゃないか。浄土が広大、広大な世界という意味で浄土が広大だということは、本願が広大だということを象徴するんだ。本願と浄土が二つあるわけではないし、如来が浄土を、やはりもとを推していくというと本願の他にありはしない。それは本願は形がないから。それで如来や浄土をもって形としていく。

不思議ということが出ているでしょう。これは曇鸞大師の解釈です。それは『浄土論』のなかにあるんです。二十九種荘厳功徳というのは不可思議力を成就した。これは如来ということを書いて、如来の尽十方不可思議光力を指します。その尽十方不可思議光をうけて、彼の世界を観ずればという。尽十方無碍光如来を、世界を観じて見るという

意味です。だから浄土を、仏心と仏土という二つで見る。仏の心が浄土だということなんです。浄土のような広いところの心を成就されている。こういうような意味が実はあります。これは面白いことであってですね、つまり尽十方不可思議光如来というのは、本願成就なんだね。こういう意味で、その成就された尽十方不可思議ということで、成就された如来なんだけれども、実際は成就された如来というものは成就は本願を表わそうとするものであってですね、不可思議光というようなものは、不可思議のはたらきというのが本願の徳なんです。如来が不可思議だということは、この本願が不可思議だということなんです。本願がもとなんです。だから、この尽十方不可思議光如来に帰命すると言っても、おさえて言えば、それでわからんことはないけれども、仏に南無する、如来に南無すると言ってもやはり、不可思議光の、そういうような徳を持っている本願に帰命する。如来に帰命するということじゃない。如来なる徳を持ってる本願に帰命する。こういう意味があるだろうと思います。親鸞の名号釈に、善導大師の名号釈を受けてですね、南無は帰命であると。南無というのは帰命である。帰命というのは本願招喚の勅命である、こういうように言っておられますね。本願招喚の勅命、本願だ。本願の招喚の端的にそういうものを表わすのが帰命ということなんだ。

本願成就の如来であるということですね。本願の徳が光り輝いておるという、そのほかに如来がないということです。だからいつか言いましたように、普通には不可思議光の如来と言うんですけれども、不可思議なる光如来と親鸞は、光と如来とを離さない。不可思議光なるところの如来と、こう言うのが普通ですけれども、不可思議なる光如来と言われる。光とはたらきです。闇をはらう、闇をはらうというはたらきが如来なんです。如来が光を放つんではない。光が如来なんです。こう非常に直截簡明なのですね。それは、もとを押さえて言えば本願です。本願が如来の根です。本願のはたらきを光という。

そういうことで、ここに本願成就の如来という、本願成就の如来と言うんだけれども、特にもう一つの意味が加わ

るんです。尽十方不可思議光如来というのは、特に真の仏ということがあるんです。真仏ということですね。真仏真土を表わす。観彼世界ということは真土を表わし、それから尽十方無碍光如来というのは真仏を表わす。真の仏身という意味です。真の仏土、真の仏身、そういうことを特に表わしたものです。だから、親鸞は『教行信証』では、「帰命尽十方無碍光如来」と、それから「観彼世界相勝過三界道」という、『願生偈』によってですね、そこに「真仏土巻」というものを作られた。一心の方は、これは「信巻」に取りあげてあるんですけれども、一心帰命の尽十方無碍光如来の方は「真仏土巻」においてその義が話してあるんですね。だからそこに、真といえば仮という意味がある。浄土にも化身化土ということがある。こういうことは親鸞以前にはなかったことです。真仮を分かつということは親鸞以前には考えられなかった。ところが『教行信証』の教学にくるというと、仏身仏土について真仮を分かつと、こういうことがある。

仏身とか仏土とか言っているのは、本願に目覚めた信心の、そこに開けてくる境地ですからね、境涯、心境を表わす。だから、そういうことが親鸞に注意されたということは、これが心境ということ、安心と言いますね。能安の心と所安の境、信仰というものには安心という意味を持っているね。安住する。これまでは自分の分別をあてにしていた。人間というものは藁でもつかむ。金をたよりにするとか、そんなことは浅い話でですね、分別をたよりにしている。四六時中、自分の分別をたよりにして生きている。駄目なもんだと聞かされたところで捨てれんのです。藁でもつかむ。朝から晩まで自分の考えをもとにして生きている。〝もとにしていいもんだ〟という保証はどこにもない。自らの心を安んずるところがない。自分の考えをたよる。そして、信仰に入ってまでその考えを捨てない。信仰のなかにその分別を持ち込んでいるから。そういうようなわけで、そこにですね、心境という、心の境というものがですね、能安の心というものが、心というものには形がないですから、ところが所安の境には形があるんですね。だから、あなたはどういう心境を持っているか、こう言えば、どういう心境に住しておられるか、それを調べればその人の信

仰がわかる。どういう心境に住しておられるかということがわかれば、住しておる信心がわかる。だから心そのものは形がないからわからんけれども、その心境の方には形がある。心境というものをいろいろ聞かれるというと、そこに、真仮というものが見出される。

これはどういうことかと言うと『大無量寿経』の一番終わりの方に阿難が浄土を見たということが出ておる。ところが長い間釈尊の説法が上巻から続いてきた。そして説法が終わってそこに阿難に命じて西方に向って礼拝せよと、こう言う。阿難が礼拝の頭をあげるとそこに浄土を見た。こういうようなことが経言で語られてある。そういうことをやはり『観経』も受けてきたんでしょう。第七華座観に、これから除苦悩法、苦悩を除く方法を説こうと、こういうように釈尊が韋提希および阿難に言われるのですが、さて、次に除苦悩の法を説くに先立って、「この話を説きたもう時」に空中に仏が住立するのを見た。この除苦悩の法と言ったら華座観の説法なのですけれど、その説く前に空中住立の仏を見たと。だから『観無量寿経』がはじめから「観」、「観」と言うているが、そこにはじめて「見」という字が出る。「見」ですね。智慧が開いた。「観」を越えて智慧が開いた。そういうことが第七華座観なんです。第七華座観において、つまりですね、そういうものを通して韋提希夫人の安心、信心の決定を表わしてある。韋提希というのは、あそこでもう救われた。けれどもまだ未来の衆生のために、「見」を開くことのできない衆生のために観法を、華座観の観法を説くことを求めた。それが華座観の経言であってですね、華座観の前も、華座観も「観」だけれども、その中間に、「観」を越えた世界が開いている。「見」の世界が開いている。その「見」というのは智慧なんであって、その智慧を無生法忍と言うんです。「与韋提等獲三忍」とありますね。そこに、智慧を開く。そんなことが『観経』に求めればそうですけれども、『大無量寿経』の一番終わりのところに出ておりますね。

面白いことがあります。それまでは釈尊と阿弥陀仏は一人になって説法が続いているようであります。あそこになると初めて阿弥陀仏と釈尊とがきちんと位を分かってですね、釈尊の除苦というのはこの穢土だ、阿弥陀仏は安養界

に影現すると、釈迦仏は迦耶城に出現すると。このようなことで穢土と浄土というものは相対してそこに現われてきている。だから、穢土にいる阿難が頭を上げるとそこに浄土を見い出す。それで、浄土を見たと思ったら、今度は浄土の方がこっちを見ておった。その浄土と穢土とが、対立しつつそこに交渉が始まる。浄土をやめて穢土に来たのではない、穢土をやめて浄土に行ったのではなくて、浄土と穢土とは対立しつつ、しかも感応道交している、という世界が書いてあるんです。そういうことを鈴木大拙は非常に興味深く、その経言を見ておられたんですけれども、それも面白いことです。

その辺は、親鸞はむしろ序の口で「開顕智慧段」という経言がそこに始まってくるんですが、この「開顕智慧段」に二十願の仏智疑惑の罪ということを明らかにしてくる。「開顕智慧段」の智慧というのは如来の智慧ですが、それはさっき言ったように五智という五つの智慧ということです。そのなかに広慧、広い慧というのが一つある。そういう経言が出てくるんですけれど。その序曲だね。浄土を見たということが序曲になっている。そうすると、見るというと、そこに浄土が二重になっているという。浄土に生まれた衆生で、そこに胎生と化生と、そこに二種類の衆生がいるということですね。そういう問題がある。浄土が二重になっている。これは一つの大きな問題を提起しているんです。そこでそれを見て、阿難じゃないんだ。阿難が浄土を見たんだけれども、浄土を見るというと二重になっている。そこに問題を、その問題をおこしたのが阿難が問うたことになってないですね。そこに弥勒菩薩が問うた。そこの意味がどのようになるか知らんけれども、そこに深い問題が起きてきている。そこにある通り、浄土が二重になっているということですね。

浄土が二重になっているということは何かというと、信心が二重だということです。信心の影ですから、浄土は。心境ですから。その心境が一重でない、皆平等というわけにはいかない。この胎生の胎という字が胎内におるという意味ですね。蓮華の花がつぼみである。ところが化というのは「正覚の華から化生する」と、こういうように言う。

形がないものが形をとるというのが化なんでしょう。自由な象徴の世界に生きている。象徴の世界というようなものが、そこで化生の「化」という字です。これは方便化身の「化」という意味じゃないですね。「正覚の華から化生する」という「化」です。ところがそればかりじゃない。そこへ閉じたままでいる衆生もある。それは閉じこもっているんだ。自分にだ。〝私〟の心に閉じこもっている。それで横に並んであるのでない、化生の中に胎生になっている。二つの浄土が横に並んだりせず、一つの浄土だ。本当言ったら化生しかない浄土なんだけれど、そのなかに、胎生の衆生がおるということです。化生は、これはつまり公開された、〝私〟が離れた世界、公開された世界ということです。公開された世界から言うとですね、事々物々が形なき形として真実報土の荘厳になっている、あらゆるものがね。山も河も、善人も悪人も、全部が一如に輝く。こういう世界なんです。それが化生の世界なんです。ところが、そういうものであるにもかかわらず、そのなかに化生が象徴と言うなら胎生というのは実体、実体観の世界を作っている。〝わたくしごころ〟では物を実体化して考える。きれいだとか汚れたとか、そういうものを固定して考える。それで小さい〝私心〟というものの世界を作って、広がった世界のなかに自分で勝手に〝私の心〟という世界を作っている。それで眼が開かない。そういうことが『大無量寿経』にある。

龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』というものを読んでみるというと、非常に意義の深いことがある。「疑えば華開けず、信心清浄なれば華開けて仏を見る」と。これは龍樹菩薩の言葉です。非常にきちんと、大事な点を龍樹菩薩が指摘している。「疑えば華開けず」仏智疑惑ですね。「信心清浄なる者、華開けて仏を見たてまつる」こう言うわけです。あらゆるものの上に仏を見る。ところが今言った閉じこもった者は仏というものを見ている。それは実体化したものだ。ところが、仏というものがあるんじゃない、あらゆるものが仏、あらゆるものが仏として仰がれる。特に仏というものがあるわけではない。仏の眼を開いてみれば、仏ならざるはない。こういうような開けです。そうでなくて仏というものを実体化して考えてもらったら困る。実体観というものでもって、自分の作った世界のなかに閉じこもる。出

れない。つまり孤独なんです。孤独にいるんだ。何も孤独でいろと言うんじゃない。世界は広がっているんだけれど、自分で勝手に孤独を作っている。普通に言うと、地獄に落ちるというものが流転しているというように考えるけれども、そうではないんだ。孤独の世界にいるのを〝助からん〟と言うのだ。「出離その期なし」なんだ、直接にね。もう永遠に見込みがないんだ。これは仕様がないんだ、壮絶をきわめているから。出離その期がないんだ、荒野に行ったら。地獄に落ちたというのは、何も〝助からん〟ということじゃないんだ。大いに助かる手がかりになる、苦しむということは。苦しまんということは、これは大変なんだ。自覚症状がない。むしろ地獄というようなことは、これは救われるという意味で、むしろ地獄をくぐって浄土がある。本当なら。地獄に落ちたという、そこに浄土に触れるんです。何も地獄は救われないということじゃないんです。つまり〝わたくしごころ〟というのは地獄以上なんです。そういうことになります。

そういうことを言っているのは「化身土巻」です。だから「化身土巻」を通して我々は反省する、それを廻心懺悔という。そういうように思い知らしてもらうことですね。みんなは真実報土だと自分で独断して決めているんです。ただ単に独断です。〝助かった〟というようなことを言っているのは独断です。そういう浄土が二重になっているということが忍の位、浄土が二重だということによって信心、安心というものが批判している。信仰が信仰自身を批判している。普通はそういうことはない。普通は信心か疑いかどっちかです。ところが親鸞教学においては〝信じた〟という形をしている疑いがあるんだ。信仰を照らしてくる。本願なんかあるものか、というそんな無邪気な疑いではない。

それで面白いことは真実報土というものに対して化身土は成り立つ。それで批判になる。だから、真と仮ですね。仏道について真仮ということをはっきりせねばいけないことは、「如来広大の恩徳を迷失する」、この厳しい言葉を親鸞は言っておりますね。浄土の真仮ということはそれほど大事なんです。その批判がないんです。だから、信仰に閉

じこもっているということは一人よがりの信仰です。一人よがりというのは得をしていると思っているが大きな損をしている。一人よがりでいる必要のない大きな世界を失っているんです。自分では、そうではない、これはうまいことしたと思っている。真実だと思っている。これがかえって、広大の恩徳を失っている。例えば〝握る〟ということがある。手で空気を握ってみなさい。そうすると空気をどれだけ握ってみても、拳に入るだけの空気だ。紙一重ぐらいの空気、拳を離せば全部ある。つかんだと言うときには紙ほどの空気だ。つかんだために、大きな空中の空気を失ってしまう。しかし失ったと思わないんでしょう。つかんでいる方を主にしていて。それは、やはり広大の恩徳を迷失する、と。得をしたと思うのが大きな損失なんだ。こういうようなことです。そこに身に余るような幸福、しあわせというものを失っている。つまり人間ではそうはいかない。どれだけ欲を起こしても、これでも足らんと言って欲を起こしている。そういうように、つかんでつかんで、なかなか離さないですね。

そういうことで初めて真実報土というものを見出すんです。化身土に対して初めて反省させられる。今、この尽十方不可思議光如来というのは、実は真実報土の仏心を表わしているという意味です。だからさっき言ったように、本願成就の如来だと言えば、真も仮も本願成就の如来、真仮共に本願成就の如来。だから、本願成就ということだけでは足りないわけです。だから、如来でも浄土でも、すべてもとは本願、漠然と言えば本願成就の如来、四十八願成就の如来、こういうようになって真仮区別なしにです。しかし本願のなかにも方便の願もある。方便の願に報われたのが、つまり方便化土ですね。ただ本願成就と言うだけでは足りないわけです。特に尽十方不可思議光如来は十二、十三願成就の如来、こういうことを表わしております。一応、真仮共に本願成就なんです。本願信仰なんです。それは本願の象徴なんです。しかし方便の願の象徴と真実の願の象徴と、二重になっている。それを特に、真実報土とか真の仏土、真仏土というものを表わすために十二・十三願、光明無量の願・寿命無量の願というものがある。こういう意味がここにあるんです。

親鸞の方を見るというとですね、面白いことは、「化身土巻」の方を見ると「仏身仏土」、身と土と二つあって、「化身化土」と言うんだけれど、どちらかと言うとですね「化身土巻」を読んで見ると、「化身」の事はあんまり語ってないです。「化土」の事を非常に詳しく、さっき言ったように「辺地懈慢」というような事を非常に詳しく語る。けれど、化の身という方はあまり語らない。これは初めの方に出ている。化身というのは『観無量寿経』に説いてある、真身観の仏これであると、それだけで、何も詳しく語っていない。けれど、化土の方は非常に詳しくですね、つまり化土の心境というものは非常に詳しく述べてある。ところが逆に「真仏土巻」の方はどうかと言うと、むしろ浄土というよりも仏身の方を書いている。非常に大事なことだと思います。逆になっているんです。化身土の方は仏土の方が、〃化土〃〃土〃の方が主になっております。「真仏土巻」の方は「真仏真土」と書くけれど、その真仏の方だけ書いている。つまり、そこに面白い事は真仏の場合は仏身と仏土は一つだ。だから浄土がたいへん大きな身なんだ。浄土というものはどこかに有るというんではない、尽十方という仏身だ。光が十方の世界を照らす。光輝くと言えば、それが浄土なんです。尽十方無碍光如来の光が輝くところが、それが浄土です。光が仏身であると共に、また仏土なんです。だから仏土にならざるはないと言う。こういうことで、仏身のほかに、また仏土がない、こういうようなことが語られてある。だからここに、これがいちばん大事なんでしょう。「一心に尽十方無碍光如来に帰命する」その尽十方無碍光如来ということ、そこに浄土が出ているんです、「観彼世界相」と言ってね。尽十方不可思議光なる如来だと。その尽十方無碍光如来の、そのまた世界が別に見えるというのではない。尽十方無碍光如来という、それがまた同時に浄土でもある。それで「真仏土巻」に「土もまた無量光明土」という言葉がある。真の仏は何かと言うと尽十方不可思議光如来だと。土は何かと言うと、土もまた無量光明土だと、こう言う。土もまた無量光明土、これは面白いことだね。無量の光が仏だ、そして土もまた、無量の光を土というんだと。こういうように仏身の他に別に仏を考えていない。仏身のままが仏土だ、と。つまり言ってみるならば、仏土のような仏身だ、それは光なんだ。そこに

固定した仏様があって光を放っているというのではないんだ、光が如来なんだ。生きてはたらく、ね。つまり純粋象徴の世界だね。特に〝仏様〟というものを考えるから化土になってしまう。

これは面白いことでね。皆さん知っているかもしらんけれど、この「無量光明土」という言葉は、『平等覚経』の経文の言葉なんです。これは何かというと、浄土の菩薩の徳を讃えた。阿弥陀仏の浄土は安楽浄土だ。その安楽浄土に生れた菩薩が、無量光明土に至ると書いてある。ちょっと分からないだろう。そうすると安楽浄土と無量光明土とは別かということになってね。「安楽浄土の菩薩は無量光明土に至って諸仏を供養し、その諸仏の国の衆生を教化する」と、こういう具合に、安楽浄土は十方の世界にはたらくというように安楽浄土の菩薩の徳という、そこに「無量光明土」ということが出てくる。経言どおりに読めば、無量光明というのは諸仏という意味だ。「無量の諸仏の土」という意味だ、無量光明土、無量の光明というのは諸仏であって、その諸仏の世界の浄土に行くという意味、経言を文字どおりに言うなら、それはそうなんですね。安楽浄土の菩薩は無量光明土に至る。無量光明土というのは、十方の無量の諸仏の世界を言う。だがむしろ、この意味は別に安楽浄土のことではないんです。安楽浄土の菩薩が無量光明土に至る。ところがそれを親鸞はさらに逆に安楽浄土が無量光明土なんだ、十方諸仏の国が別にあるわけではない。安楽浄土から見れば十方諸仏の国が安楽浄土なんだ。安楽浄土は西方浄土と言う。我々の世界からいうと西にあるというわけです。その西というのも一つの象徴なんだね。西にあるというけれど、それは穢土から、さっき言ったように阿難が穢土におって浄土を見ると、浄土は西にある。では浄土から見たらどうなる。浄土から穢土を見たらどうなる。本来のところは、穢土というものも浄土のなかにあるんだ。そうなると、穢土から浄土を見るから西方と言うけれど、浄土から見たら十方世界だ。全部浄土のなかにある。そういう具合になるんではないかと思うんですね。尽十方、十方を尽して浄土あり。

そういうように人間の世界から眼鏡かけて見るというとですね、人間から世界を見るのと、世界から人間を見るの

とは逆になってしまう。人間から世界を眼鏡かけて見ていると、人間を超えて世界に立って人間を見るのとは、大変な違いです。やはり日本人も一度海を渡ると、中国でも何でもいい、フランスのパリでもどこでもいい、とにかく一度海を渡って外へ出てみたら、身にしみて自分らは井戸のなかにおったということがわかる。行くまでにもきちんと地理の本読んだりして世界の事知っているね。しかしそれは眼鏡をかけて見ている。眼鏡かけて世界を見ているんであって、眼鏡をはずして見た事がない。世界、海を渡って行くと初めて眼鏡をはずして見る。そうするといちばんよくわかるのは、自分がよくわかる。井戸のなかにおったということがね。そんなようなもんではないかと僕は思うんですけれども。

人間の立場によって仏の世界を覗いているのではなしに、まず第一に仏の心に目を覚ますんです。「いそぎ念仏して」というのはそうです。だんだんにということで、そのことを人間はいちばん最後にするから間違っています。それは最初にすればいい。まず、本願の世界に眼を開く。仏の心に目覚め、仏の心をもって世界を見る、そういうことが大事です。そうすると同じ穢土を見ても見方が違うんだろうと思うんです。仏の心をもって世界に立つと、人を叱るというようなことがなくなるのではないかと思うんです。いろいろ人間というのは大変なものですからウロウロしてますわね、「何しとるんか」と。そういうものが、人間の眼鏡で見るからそうなるんであって、仏の眼鏡から見れば、ウロウロしておるということが、求道心を発してウロウロしているんです。その根の方にね。そのウロウロしている人は意識しないけれど、本当は意識の底の方で求道している。意識の底とは本能だ。本能が本能として願生浄土という願心に生きている。求道心を持っている。だからそれがはっきりしないためにウロウロしているんだ。ただ徒らに、楽しんでウロウロしているものはいない。求道心に立っているので、ウロウロしているということも深い意味があるんです。求道心を離れてしまえばウロウロはやはりウロウロだけなんです。欲深いから勝手に困っているんだろう、それだけの話しになります。そうではない。欲が深いということも、求道心があってはっきりしないから欲が

深くなっているんです。欲が深いということも、人に菩提心があればこそ欲が深い。菩提心が発しておるけど、菩提心がはっきりしないから、やむをえず欲が深くならざるをえない。そういうことで欲が深いということにも同情が起きましょうが。

やはり、深い如来の心に眼を開いて見る。浄土の眼を開いて穢土を見ると、そうだ、そこに深い同情が起きる。けれども、眼鏡をかけていたら、それは叱りとばすだけだ。何ウロウロしているんだと、自業自得で勝手に悩んでいるんだと、そういう冷淡な話しになってしまう。面白いことだ。これは、言ってみれば、パチンコなんかにいつも不真面目で行っているんでなく真面目だけれど真面目が何かわからないから不真面目になっている。パチンコでごまかしている。あれは不真面目な証拠じゃなく真面目な証拠だ。その真面目な道を求めているけれど道が見つからん。それだからパチンコぐらいで気を晴らすというようなことになる。みんなそういうようなものではないかと思っているんです。欲の深い、欲が深くて困っているというのも、ただ困っているというような慰みに困っているんではなかろう。だから「和讃」には「三世諸仏のみもとに、菩提心を発したけれども、菩提心がかなわないで流転している」。菩提心を発さず流転していれば、本望です。菩提心を発したけれどもその菩提心を成就する方法が見つからない。やむをえず流転している。菩提心が裏にあるから流転も成り立つんです。求めるけれど得られない、得られないけれど求めずにはおれない、というようなことが背景となって、いろんな欲を起こしている。これはその人の意識を見て、人間というのはわからんと言うのはそこにあるのです。その人の意識だけではその人はわからん。そうすると本能まで下がってみるのです。その人の意識というのだけに目をやると、人間の意識というものはいいかげんなものです。けれど、その本能はただいいかげんなものと言えないのではないか。いいかげんなものの底に根がある。だからその人に聞いてみても、自分のことを言えない。言っているのはその人の小さい分別で言っているだけの話しであって、聞きたいと言ったところで、その人自身が聞きたいことがわからない。ただいいかげんに聞き覚えたことで言っているだけの

話しであって、本当に聞きたいのはその底にあるんですよ。でもその底のことを言い表わす方法は、知らない。

本願成就の如来、それだけでは足りない。本願成就の如来というのは、真仏真土も化身化土も皆、本願成就の如来です。だから、その方便というものを真実に返すわけです。方便を真実に返して真実から方便を展開するんであって、その展開した方便をもう一方の真実に返して、そしてそこに真仏真土というものを書いてある。これは経典から言えば十二、十三願ですけれども、論から言えば『浄土論』です。経典の方から言えば真仏真土、本願です、十二、十三願です。それから論の方から言えば『願生偈』です。

（本稿は、岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年七月四日午後の講義の筆録の前半を整理したものである。文責編集部）

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。